

今日の黙想のてびき

週日聖書日課 ヤコブの手紙 1:1~11
2025年4月2日(水)

◆文脈と言葉

- ヤコブの手紙、ペトロの手紙一・二、ヨハネの手紙一・二・三、ユダの手紙の7つをまとめて「共同書簡」と呼びます。パウロの各手紙のように、特定の地域の教会や個人に宛てて書かれた手紙とは異なり、これらの手紙は一つの教会、一地域の教会を超えて、広く一般の教会にあてて書かれた手紙である、と考えられてきたからです。「離散している十二部族の人たちに」(ヤコブ 1:1)というやや漠然とした宛名もこのことを表していると考えられています。
- この手紙は、外的迫害とこの世(特に富)の誘惑の中にある信徒たちに指針を示すと共に、思想化してしまった信仰のみを主張する「パウロ主義」(パウロ本人はそうは言っていない)に反対して、行いも大切であることを強調しています。「信仰を持っていると言う者がいても、行いが伴わなければ、何の役に立つでしょうか」(2:14)。
- 形式上は手紙の形をしておらず、いくつかの勧告が連ねられている書物だと理解されています。勧告がイエス・キリストの救いの業との関係で語られておらず、パウロの手紙の勧告部分とも様子が違います。

◆黙想のすじみち

(1)あらすじと説き明かし

- 手紙の冒頭で、著者は試練を喜びとするように勧めます。信仰に対する試練は忍耐を作り出すからです。試練のもとで信仰の忍耐を示す人は完全になります。「完全」というのですから終末を見据えています。終わりの日まで忍耐して試練に耐え、信仰を保った人は、裁きの時に選ばれる人になるから、喜びなさい、と励ますのです。
- 欠けがない完全なものは神のよってのみ作られます。だから、完全を願う者は神に願うのです。祈り願うことそのものは信仰をもってなすべき人間の責任です。揺れ動き、生き方が定まらない中での祈りは聞き届けられないと著者は言います。信仰をもってしっかり立って祈ることが求められます。
- 神は低い人を高め、誇る人を謙遜にさせられます。貧しい人は今の時点で神によって高められる喜びが与えられます。「富んでいる者は、自分が低くされることを誇りに思いなさい」とは皮肉めいた言葉です。富む人は、熱風にさらされる草花のように、世においてはやがてすたれます。そのときに富む人は貧しくなるのですから、神の憐れみをいただけるということでしょうか。